

# まえがき

櫻田美雄

## 1.

平成9年度の現代国際社会文化ゼミナール1（櫻田ゼミ）のテーマは「エスノメソドロジーに関する基本的知識の修得」であった。

扱ったテキストは以下のとおりである。

- 1) 中島道男「『意味学派』の立場」荻野昌弘・正村俊之編『社会学の世界』八千代出版
- 2) サーサスほか『日常性の解剖学』マルジュ社（サーサス「序論」、ガーフィンケル「日常活動の基盤」、シェグロフ&サックス「会話はどのように終了されるのか」）
- 3) シャロック「知識を所有することについて」『年報筑波社会学』7:91-108
- 4) 西阪仰「行為出来事の相互行為的構成」『社会学評論』39-2:102-118
- 5) 岡田光弘「『制度』を研究するということ」『現代社会理論研究』6:165-180
- 6) Hilbert "Garfinkel's Recovery of Themes in Classical Sociology" 『Human Studies』18-2&3:157-175

本ゼミ論集は、そのタイトルを『エスノメソドロジーとその周辺』とし、これらのテキストを読んだうえで、各自が考えたことを書いてもらった。

なお、執筆に当たっては、以下の3つの点について注意喚起をおこなっている。

- ①ゼミでの学習内容と関係した論述であること。
- ②卒論の準備ではなく、提出原稿自身でまとまりのあるものであること。
- ③知的生産物としての基礎的条件（文献表の様式など）を備えたものであること。

## 2

集まった原稿は期待以上のもので、徳島大学総合科学部（および、大学院人間・自然環境研究科）の学生の潜在能力に驚いている。以下いくつかの論文について、簡単に読みのポイントを紹介し、読書案内としたい。

(1) 出口論文（「虐待と試練の間—『巨人の星』に見る—」）について。

出口論文は、まず素材さがしの成功（有名な判例とマンガ）によって読者の興味を獲得できているという利点をもっているが、本当の価値はその主張の「スマートさ」にあるといえよう。「ひだるまボール」による特訓が「虐待」ではなく、「試練」となっているようすを、「本質主義」的にではなく「状況」的に解明しようとしている彼女の姿勢はたいへん社会的だと思われる。

(2) 寺尾論文（「失語症患者のコミュニケーション」）について。

寺尾論文（正確には研究ノート）は、2つの意味で重要だろう。一つは、コミュニケーションの原理論的意味においてであり、もうひとつは、障害者（処遇）研究としての応用的意味においてである。とりわけ後者における含意が重要と思われる。すなわち、ここに示されているコミュニケーションの徹底した相互行為性こそは、個人的「能力」というものが、じつのところ、相互行為的に達成されているものであることを示している。と、す

るならば、ある場面で、最低の「コミュニケーション能力」だと認定された「障害者」(ロブはそう言われかねなかった)であつても、別の場面では違った「能力」を示す可能性があることになる。これは、障害者を「能力的序列構造」から解放する突破口になるのではないだろうか。この領域でのエスノメソドロジ的研究の充実が期待される。

### (3) 他の諸論文について

関連して読める論文が、いくつかある。まず、奥田論文と津村論文。どちらも「性現象」をあつかっているが、奥田論文が基礎理論、津村論文がその応用というような読み方が可能だろう。つぎに、杉野論文と高木論文と中恵論文。これらは学史的な作品であり、それぞれゴッフマンのスティグマ概念、ガーフィンケルの学史的出自、エスノメソドロジ的信頼論の位相を扱っている。

9本の論文と研究ノートは、全体としてはまだまだ思索が不十分なところも多い。しかし、彼らなりのオリジナルな主張も散見される点は評価して頂きたい。内容その他について、是非とも、ご批判賜れば幸いである。